上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要

趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也

要旨

本稿は「大阪上町台地の総合的研究」（註 1）を分担した古環境 GIS チームが、上町台地とその周辺部を対象にして、GIS を構築し作成した更新統上面等高線図 1 葉と古地理図 5 葉の概要説明である。各図は遺跡の発掘データを中心に、明治以降の地形図や土地条件図、近世の古絵図なども参考にして作成した。弥生時代後期は人間による本格的な土地改変より前の姿、古墳時代後期は台地の開発、古代は前・後期難波宮および難波京の造営、中世後期は集落と大坂本願寺、豊臣後期は大坂城築城と城下町開発にそれぞれ焦点を当てつつ、地形と地質の変遷を説明している。

１、はじめに

大阪平野を南北に伸びる上町台地とその周辺部を対象にして、地形学と地質学、古植物学などの自然科学の手法に、考古学と文献史学の視点を合体させて総合的に検討し、古墳時代以来の都市大阪を通史的に捉えようと、2009 ～ 2013 年度に「大阪上町台地の総合的研究」（註 1）が実施された。筆者らはこの総合研究を考古情報・文献情報チームとともに研究分担した古環境 GIS チームとして、GIS の枠組みを構築し（市川ほか 2011）、これを基に総合研究の基図となる更新統上面等高線図（巻頭図版 1）と、弥生時代後期・古墳時代後期・古代・中世後期・豊臣後期の各時期の古地理図（巻頭図版 2 ～ 7）を作成した。本稿はその概要説明にあたるものである。

本書の巻頭に示した各図の範囲は、北限が北区の阪神梅田駅付近・南限が阿倍野区の JR 美章園駅付近をそれぞれ通る東西線、東限が東成区の地下鉄緑橋付近・西限が浪速区の JR 難波駅付近をそれぞれ通る南北線とした。各図の作成にあたって、台地と台地斜面は、難波宮跡～大阪城を中心とする北端部を市川が、上町筋より西の西北端部を平田が、真田山町～瓦屋町 2 丁目以南を高橋が分担した。また、低地は、台地東側～大川以東の河内沖積低地を小倉・趙が、台地西側の難波砂州～台地北側の天満砂州南端部を趙が分担した。また、これらの図に松田は景観復原と堆積学の観点から、辻本は古植生学の観点から検討を加えた。作図の根拠となる観察や考察については、本書所収の各報文など（市川 2013、平田 2013、高橋 2013、小倉 2013、趙 2014、辻本 2014、松田 2014）や本書付録 DVD 掲載資料を参照されたい。また、土地条件や断層・撓曲などの分布概要については、国土地理院（1983）と中田ほか（2008・2009）に基づいて作成した本書掲載の市川ほか（2011、図 1）を参照されたい。

２、地形

(1) 上町台地（狭義）と我孫子台地

上町台地は大阪平野の中央を南北に伸びる台地であり、後期更新世後半に隆起した台地のうち、現大和川から天満橋までの南北 11 km余り、東西 2 ～ 3 kmの部分を指す（図 1）。台地は北の大阪城から南の住吉大社南端まで伸びる西側の台地と、御勝山から我孫子・山之内を経て現大和川の南の堺市

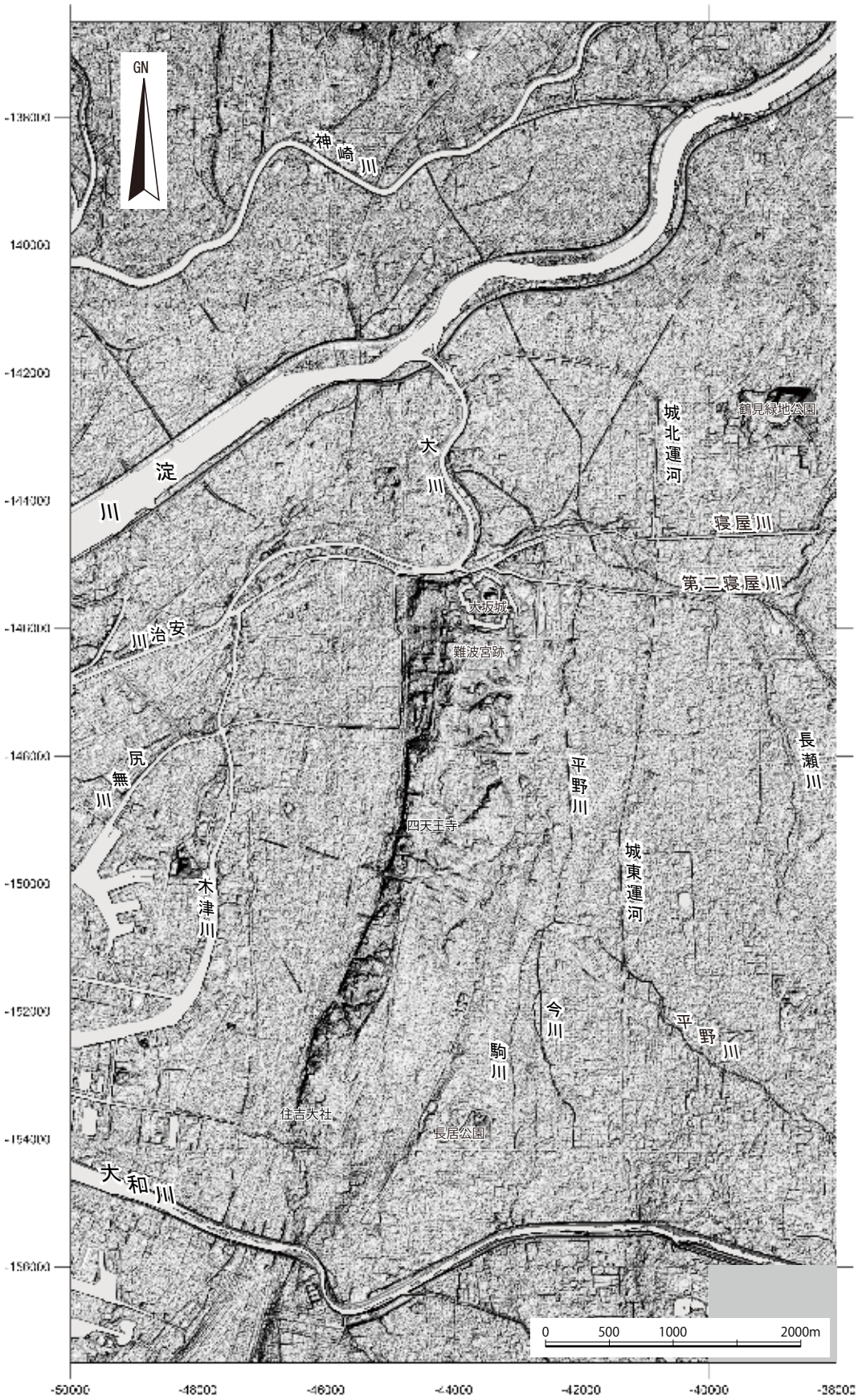

図１　上町台地とその周辺低地の陰影図

国土地理院発行の数値地図 5m メッシュ（標高）をもとにして作成。太陽は南東・高度 60°の方向から。

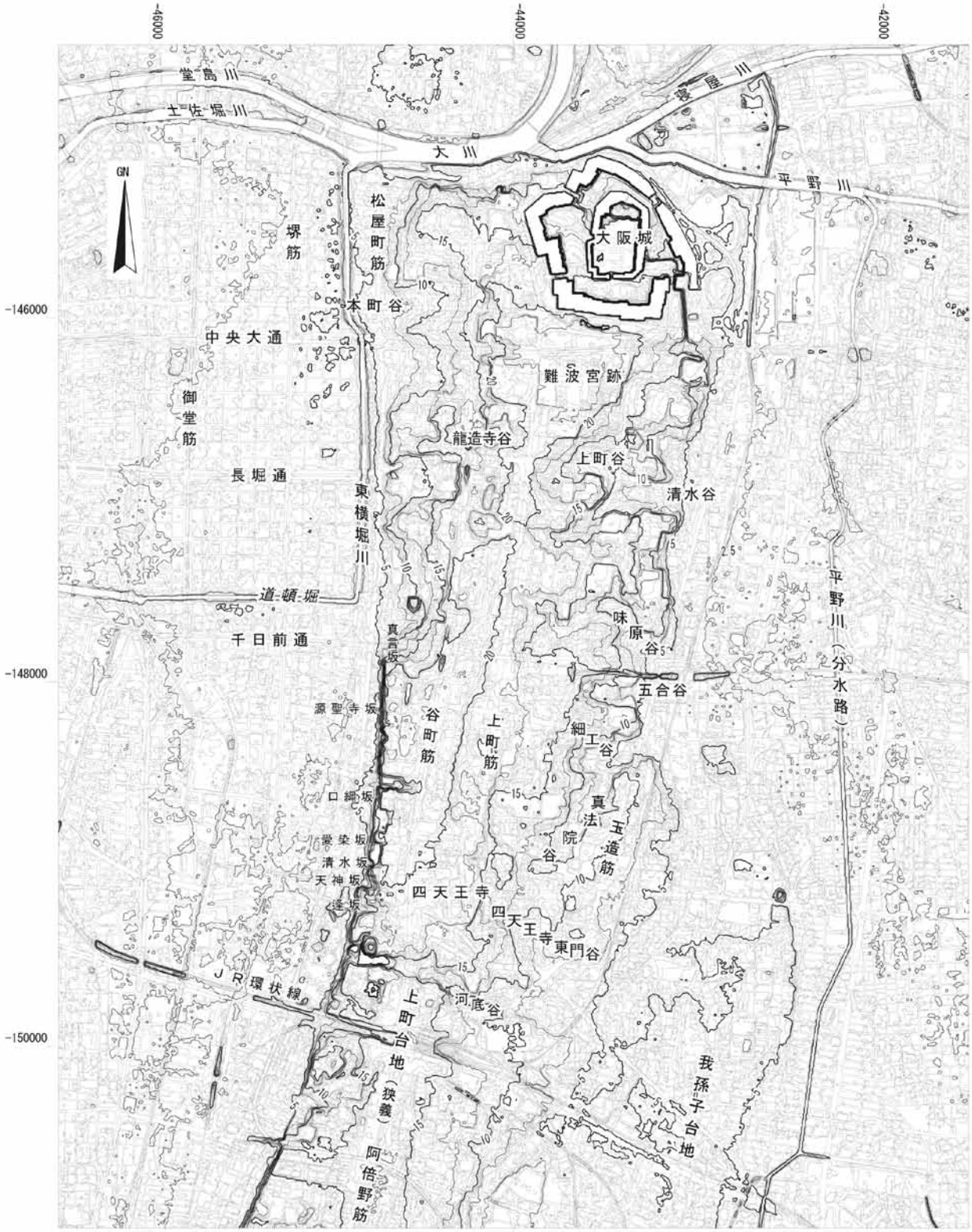

図２　上町台地北部の等高線図

国土地理院発行の数値地図 5m メッシュ（標高）と数値地図 2500（空間データ基盤）をもとにして作成。主曲線は 0.5m 間隔の細線、計曲線は 5m ごとに太線、さらに 2.5m ごとに中太線で描画。

三国ケ丘に続く東側の台地に分けられる。西側台地の北部では、北北東－南南西方向の稜線が台地の伸びと15度前後斜交し、台地西側に偏って海抜25～15mと南へ徐々に高度を下げ、台地南部では北北東－南南西方向の稜線と台地の伸びがほぼ一致して20～10m と南へ徐々に高度を下げている。一方、東側台地は西側台地南部とほぼ並行するが海抜15 m以下と低い。1953 年刊行の『住吉區誌』では、西側を上町台地、東側を我孫子台地と呼び分けている。またこれ以前にも、大阪層群研究グループ（1951）は、詳細な記載はないものの、地質図上で西側を大阪層群の上位層、東側をさらに上位の段丘礫層として区分している。『住吉區誌』のいう上町台地は上町層の中部海成層の堆積面が原形であり、我孫子台地は低位段丘を構成する砂礫層の堆積面であると考えられる（趙2006）。本稿でも上町台地（狭義）、我孫子台地の呼称を用いることがある。さらに本稿では、天王寺区河底池を通る東西方向の凹地（後述する河底谷）を境に、上町台地（狭義）を仮に北部と南部に呼び分ける。

(2) 更新統上面等高線図と谷

巻頭図版1は上町台地と周辺の河内沖積低地や大阪海岸低地の地下に分布する更新統上面の等高線図である。この図の作成には、1000件をはるかに超える発掘調査で得た標高データとボーリング柱状図から得た標高データを用いている。等高線は2m間隔の主曲線を基本とし、必要に応じて1m間隔の間曲線や0.5mの補助曲線を用いる。

発掘件数の多い台地北端部の難波宮跡・大阪城跡周辺では、精度の高い起伏が描けている。一方、発掘件数が少ない台地北部の南側では、陸地測量部明治19年発行の仮製地形図と国土地理院発行数値地図5mメッシュにより作成した現況の詳細等高線図(図2)なども参考にして等高線を描いている。

東西の低地地下の等高線の作成には、主としてボーリング･データを用いている。ボーリング･データはKG-Net･関西圏地盤情報協議会･関西圏地盤DB運営機構が蓄積した「関西圏地盤情報データベース」と、大阪文化財研究所が独自に収集したボーリング柱状図から得た標高データを用いている。このように、この図の等高線には精度の粗密があることに注意しなければならない。

台地上には清水谷や細工谷などの現在の地名にある開析谷のほか、多くの谷が埋没している。台地北端部の谷は、寺井（2004）によって最初に図示され、調査の進展により加筆･修正が行われてきた（寺井2010など)。また、高橋（2007･2010･2011）などにより、台地北部の広い範囲の谷の分布が分かってきた（巻頭図版1)。

台地北斜面　東から本丸谷と大手前谷がある。本丸谷はMitamura et al.（2012）によりボーリング資料から復原された谷であり、豊臣氏大坂城の本丸の西側内堀に利用されたと考えられる。本稿で命名した。大手前谷は大阪府警や大手前高校敷地で支谷の存在から寺井（2004）によって現大阪城の西外堀に沿う三の丸側に描かれた谷である。しかし、その後の調査で推定位置に谷が検出できなかったことから、主谷は現西外堀の位置にあったものと考えられる。

台地東斜面　北から井戸曲輪谷、森ノ宮谷、玉造谷、清水谷とその支谷である上町谷、味原谷、五合谷、細工谷、北山谷、真法院谷、四天王寺東門谷がある。このうち、森ノ宮谷と玉造谷は寺井（2004）が、味原谷・五合谷・北山谷・真法院谷は高橋（2007）が、四天王寺東門谷は高橋（2011）がそれぞれ命名した谷である。

井戸曲輪谷はMitamura et al.（2012）によりボーリング資料から復原された現大阪城本丸から東に下る谷であり、豊臣氏大坂城の築城時に埋め立てられたと考えられる。本稿で命名した。森ノ宮谷は元日生球場を北西から南東に下る大規模な谷である。現KKRホテル大阪の地下で支谷が検出されたが、主谷の谷頭は未詳である。大阪文化財研究所（2012a）は、地すべり地形であり、白土の壁土が多量に捨てられた元府立青少年会館敷地の北谷を支谷の一つと考えている。支谷の谷頭は古墳時代中期以降、断続的に埋め立てられている。玉造谷は玉造1丁目を北西から南東に下る谷であり、寺井（2010）では元府立青少年会館敷地まで延長させている。同敷地の地すべり地形である大阪文化財研究所（2012）の南谷が谷頭にあたると推定される。谷頭部は古墳時代中期以降、断続的に埋め立てられている。また、同じく地すべり地形である大阪市文化財協会（2010）の谷も、玉造谷に合流する南側の支谷の谷頭と推定される。古墳時代末以降、断続的に埋立てが行われている。なお、趙・清水（2011）が推定した森ノ宮谷に沿う東向きの玉造谷の谷筋は確認されていない。

玉造谷以北の谷が現在の地形からは存在が認め難いのに対して、清水谷以南の谷筋は、現在の地形にも顕著に表れている。その中で空堀町から空清町へ下る清水谷は、特に明瞭で幅広い谷筋が認められる谷の一つであり、豊臣氏大坂城の惣構南堀に利用されている。清水谷の北側に派生する上町谷の上流部斜面には、初期須恵器を焼成した5世紀代の窖窯である上町谷窯1･2号が見つかっている（大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012）。古代以降、断続的に埋立て造成されてきたと考えられる。味原谷は東高津町付近を源流とし、味原本町から船橋町に下る谷である。谷の埋立ては江戸時代後期にはじまるが、近代までは中流域の味原本町に灌漑用の味原池があった。五合谷は筆ヶ崎町から下味原町へ下る谷である。支谷は古墳時代中期以降断続的に埋め立てられるが、主谷は古墳～奈良時代にかけて谷底が浚渫されたと考えられており、また、谷の名残りは難波朱雀大路跡と推定される森之宮勝山線に接する溜池や台地上の水田域として1886（明治19）年の『大阪実測図』から読み取れるなど、谷が一気に埋立て造成されることなどはなかったと考えられている。真法院谷は細工谷交差点から五条公園を経て南南西に伸び、四天王寺の東方で北西方向に振る比較的勾配の緩い谷である。奈良時代以前に埋立て造成が始まっている。細工谷は真法院谷の支谷であり、古代寺院である百済尼寺の推定地である筆ヶ崎町の高台の南限を刻む急勾配の谷である。斜面部分では7世紀後半以降に盛土造成が始まっている。北山谷は天王寺区役所の位置に近代まで存在した毘沙門池を源流とし、北山町から松ヶ鼻に下る真法院谷の支谷である。高橋（2010）で詳しく記載された。北山谷のさらに小支谷である小宮谷では、難波京の西一路に架けられた橋が見つかっている。8世紀中葉以降に大規模な埋立て造成が行われている。四天王寺東門谷は四天王寺東門付近を谷頭として南東のJR寺田町駅方面へ抜ける谷である。15世紀に本格的な土地利用が始まったと考えられている。

台地西斜面　北から釣鐘谷、本町谷、農人谷、龍造寺谷があり、四天王寺の南で台地北部の南限を東西に横切るのが河底谷である。これをさらに越えて台地南部には阿倍野区旭町の旭通の谷がある。釣鐘谷・本町谷・龍造寺谷は寺井（2004）、農人谷は趙（2012）、河底谷は市川（2013）のそれぞれの命名である。

釣鐘谷は谷町筋の東、谷町1丁目付近を谷頭とし、釣鐘町を経て本町橋へ下る谷である。前期難波

宮造営期に支谷の埋立てや整地が行われている。本町谷は大手3丁目の大阪府警北側から西南西に下る谷である。寺井（2004・2010）では谷頭を大手前谷と共有すると考えたが、大手前谷を西外堀内に推定し直したことにより、現状では本町谷自身が谷頭を南に振ると考えるのが妥当であろう。いくつもの支谷があり、釣鐘谷と同様に、前期難波宮造営期に整地が行われている。龍造寺谷は大阪医療センター敷地の東南部に谷頭があり、南西へ下った後、安堂寺通の手前で折れて谷町筋を北上し、農人橋通を西進する。大小の支谷があり、そのひとつ、農人橋2丁目付近から南東に伸びる支谷を南大江谷と呼称する。南大江谷が長堀通で地すべりと推定される凹地により切断される付近では、古代～中世の泥層の上を豊臣後期の整地層が覆っている。農人谷は中央大通に沿って西へ下る谷である。松屋町筋に近い農人橋1丁目で龍造寺谷とは区別できることが明らかとなった。寺井（2004）では龍造寺谷の支谷として大江小学校付近から北東へ伸ばしている谷を指していると思われる。

千日前通から北側の台地西斜面では谷が刻まれ、比較的大きな地すべりも推定されるのに対して、千日前通の南側から台地南部の旭通の谷の北までは急崖が続く。この崖は縄文海進期の海食崖であり、天王寺七坂（註2）がある。

ところで、台地上の比較的深く長い谷の方向は東西～北東―南西方向やこれに直交するものが多い。これらと明瞭に方向が異なるものが河底谷である。河底谷は『続日本紀』が河内平野の洪水対策として和気清麻呂が河内川の水を大阪湾へ流すために開削したと伝える排水路に当る可能性があるが、その信憑性を肯定できそうなボーリング・データを記載したので（趙2013）、今回、可能性を図に表現した。

大阪海岸低地の地下　いくつかの地形面が認められる。台地西斜面にある釣鐘谷・本町谷・農人谷・龍造寺谷は一筋の谷に合流して北西へ下っているのがわかる。また、千日前通から南にはTP－3～－2mに平坦面が広がる。この平坦面は縄文海進期高潮位期の海食台に相当すると考えられる。－3mより低い西側の緩斜面は、海進期の侵食を受けてはいるが、海面上昇が速かったために極端な侵食から免れた海進以前の台地斜面に近似な地形を反映していると考えられる。したがって、台地斜面の崖を含めれば、縄文海進は縄文早期以前の上町台地を侵食して最大で1km近くも後退させたことになる。台地北端部から南西方向に北西傾斜の斜面が認められる。－26mの東北東－西南西方向の凹地は、古大阪川の河道の一部と推定され、北西斜面も古大阪川の形成に伴う侵食面であろうと思われる。しかし、この斜面は上町断層から派生し南側が上がる桜川撓曲の推定位置とほぼ一致することから、桜川撓曲の変動地形が反映している可能性もある。

河内沖積低地の地下　玉造谷・清水谷は合流して北東に流れる急峻な谷をつくっている。また、味原谷・真法院谷・四天王寺東門谷は、北東向きの谷に合流している。この谷は上町台地（狭義）と我孫子台地を分ける長居断層に沿う長池・桃ヶ池の地溝を流れる。これらの谷や森ノ宮谷は、TP－18m以下を北流する深く広い谷に流れ込んでいる。この谷は旧石器時代の古平野川である。古平野川と台地の間には顕著な平坦面は認められず、海食台の平坦面がある台地西側とは対照的である。縄文海進は内湾より外湾の侵食力がはるかに大きかったことを示している。

３、古地理変遷

ここで解説する古地理図は、遺跡地の地層ごとの標高データと、市川ほか（2011）の「地表面と表層物質」の中の「地表物質の種類」に基づき、等高線、陸域の段丘構成層と完新統の岩相分布から推定した台地・低地・砂州・沖積リッジ・湿地・盛土地、古文書や古絵図にある集落や道など、および水域を図示したものである。また、上述の仮製地形図のほか、土地条件図（建設省国土地理院 1983）も参考にした。しかし、地表物質の種類の中で作土に関しては、土地利用の観点からの詳しい検討が不十分なため、確認地点を示すに留めた。また、土壌についても、判定基準が不統一なため、これも確認地点を示すに留めた。これらについては、植生図を作成した辻本（2014）や松田（2014）がさらに詳しい検討を行って分布域を推定しているので、これを参照されたい。なお、本稿では、国土地理院（1965・1983）の難波砂堆・天満砂堆は、離水地形としての名称として難波砂州・天満砂州の呼称を用いる。

（1）縄文時代後期～弥生時代

巻頭図版 3（古地理図 1）は、弥生時代後期～終末期をイメージして描いたものである。

上町台地　弥生時代の上町台地北部は、谷の下流部が埋積作用で浅くなっているが、台地上は更新世の状況（巻頭図版 1）と大きな変化はなかったと考えられる。辻本（2014）ではシイ・カシ類などの高木となる常緑広葉樹を主体とする暖温帯性の森林植生が成立していたと考えている。

難波砂州　2 列の砂州 A・B と、上町台地（U の記号を与える）・砂州 A・B 間の 2 列の潟湖（ラグーン U/A、ラグーン A/B と呼ぶ）、および砂州 A・B の北端部にはこれらと斜交するように河口州 1 が復原される。

この地域で最も古い遺物は、ラグーン U/A の東岸で見つかった縄文時代後・晩期の土器である。土器の包含層は生物擾乱が認められる湿地の泥質砂層であり、出土地は外湾に面した沿岸ではなく、既に第 1 列の砂州 A とラグーン U/A が形成されて内湾に面していたと考えられる。砂州 A の北端部には、周囲より一段高く標高 2m を超える浜堤が形成されていた。

砂州南部の恵美須遺跡（巻頭図版 1 ～ 7 の区画 B12）では、砂州 A の外湾側と推定される砂礫干潟の堆積層中から縄文時代晩期の土器が見つかっている。砂礫干潟の堆積層の上位は、弥生時代前期の土器を含む礫層を挟んで、弥生時代後期の土器を含む砂・礫層と巣穴の化石が顕著な有機質砂質泥層の互層が重なる。このことは弥生時代中期を前後する時期に外湾の砂礫干潟が内湾の砂泥干潟に移り変わったことを示唆し、その原因は第 2 列の砂州 B の形成による外湾との隔離と考えられる。大阪文化財研究所（2012b）によれば、弥生時代後期の沿岸にはクロマツが林をつくり、ラグーン周辺には、コアマモ、カワツルモ、イトクズモなど汽水に耐える水棲植物が繁茂していたが、ラグーンは古墳時代前期にかけてしだいに淡水域に変化し、ヨシ・ガマの群落が拡大している。また、土器が比較的多く出土することから、砂州や遺跡に近い台地の縁辺に集落があったと考えられる。

難波砂州の北端部には、当時の河内湖から大阪湾への幅広い河口に面して、北東－南西方向に伸びる河口州 1 がある。河口州の形成は弥生時代中期末には始まっており、中期の土器を含み上部外浜とみられる生物擾乱の著しい砂層の上に、河内湖から吐き出された西向き・一部北西向きのトラフ型斜交葉理をもつ砂・礫層が重なり、最上部はアンチデューンが形成されている。洪水により堆積した河

口州が離水する状況を示していると考えられる。この砂州は弥生時代後期には離水して安定した土地になっていたようで、土壌が生成し、弥生土器を包含する土壙が見つかっている。海岸縁に集落が存在したのであろう。

天満砂州南端部　この地域で弥生土器の出土が確認できたのは、砂州東部では同心町遺跡の中・後期土器を含む遺構内と、砂州西部では曽根崎遺跡の後期土器を含む前浜堆積層中であり、それぞれ古地理図1に示した三角州の東西のローブ状の張り出しの上に当たる。中央のローブでは遊離資料が徳川期の盛土中から1点出土したのみで本来の層準は不明であるが、2mを超える標高は難波砂州では弥生時代に形成されたもののみであるため、中央のローブもこの時代に堆積した可能性があるものとして描画した。

河内沖積低地　平野川の河口が河内湖を埋め立てて前進しつつあった。沿岸には断続的に自然堤防や砂州が形成されたと考えられ、自然堤防や砂州と台地の間の氾濫原には沼沢湿地が形成された。湿地にはオモダカ科やイグサ属、シャジクモ属、少し乾いたところではススキ類、チガヤ類、キク科草本などの草地が、また、土壌生成が進行する安定した領域にカシ類や落葉広葉樹のナラ類、エノキ・ムクノキなどの林が広がっていた（辻本2014）。

この時代の台地北端部東縁には、縄文時代中期以降の大規模な貝塚を中心に開けた森の宮遺跡があった（難波宮址顕彰会1978・大阪市文化財協会1996）。森の宮遺跡は森ノ宮谷の谷口左岸にある。弥生後期土器は貝塚上部のシジミ貝層堆積後の土壌とみられる地層から古墳時代や古代の土器とともに出土している。また、森ノ宮～玉造にかけてパッチ状に分布した沼沢地の周辺地域で活発な人間活動があったのは弥生時代前期～中期前葉であり、後期の活発な活動は知られていない。この現象は、難波砂州の北端域に後期の集落が出現したことと呼応するかもしれない。また、植物珪酸体や花粉分析からは近隣地域での稲作が示唆されるが、発掘調査では水田や畠は確認できない。

(2) 古墳時代

巻頭図版4（古地理図2）は、古墳時代後期をイメージして描いたものである。

上町台地　台地北部では古墳時代中期から積極的な人間活動が展開する。その顕著な証拠は谷の埋立てである。清水谷や北山谷などの真法院谷の支谷で谷頭の埋立てが行われている。埋立ての規模はまだ小さいが、これに呼応して、台地上の植生は大きく変化する。カシ類などの常緑広葉樹の森林にナラ類、マツ類などからなる二次林が混交し、イネ科やヨモギ属などからなる草地や植生の貧弱な荒地が拡大するなど、多様な植生景観が成立してくる。人間の土地改変や森林資源の収奪といった人為的植生撹乱の現れである（辻本2014）。古地理図2には法円坂倉庫群、法円坂窯、上町谷窯のほか、御勝山古墳、茶臼山“古墳”を示した。周辺では埴輪などの古墳関連の遺物が見つかっており、台地北部にも古墳が造られていたと考えられている。四天王寺境内からも埴輪棺が見つかっている。

難波砂州　『日本書紀』仁徳11年正月の条の「照る難波の崎の並び浜　並べむとこそ　その子は有りけめ」の歌は、前段階以来の並列する砂州A・Bを見て詠んだものであろう。台地の西側低地や東側低地の植生は、台地上ほど顕著な変化は起こっていない。しかし、難波砂州が形成される過程で、いくつかの重要な事件が起こっているのが恵美須遺跡で観察されている。古墳時代前期には、鉄砲水

がラグーン A/B 中の澪筋を流れ下り、因果関係は不明だが、大きな地震が起こっている。古墳時代中頃には、砂州 B を乗り越えた断続的な遡上波が砂州 C を形成し、これが浜堤を構成している。この浜堤は後に豊臣秀吉により紀州街道として整備されることになる。

古墳時代末ごろには、沿岸部が大幅に侵食され、砂州 C の大部分が消滅した。しかし、間もなく砂州 D が堆積して海岸線は復旧し、砂州 D の南部では海岸線は前段階よりもさらに西に後退した。砂州の先端部では、古墳時代末ごろに大川の氾濫で左岸に河口州 2 が堆積してラグーン U/A が堰き止められ、ダムアップしたラグーンの水が西側に流れ出て、河口州 1 との間に入江状の湾入部がつくられたと考えられる（趙 2006）。これを道修町の入江と呼ぶ。

天満砂州南端部　梶山ほか（1986）は長柄砂州（天満砂州）を上町台地側から北に成長したと考えている。しかし、天満砂州南端部では弥生時代の遺跡は未発見であり、古墳時代中期以降に遺跡が展開していることや、基盤層やこの時期の海浜堆積層の古流向などから、古墳時代中ごろに淀川の三角州が前進し、台地との間を狭めて大川を形成したのではないかと考えられる。『日本書紀』仁徳 11 年四月の条の「郊澤は曠く遠くして、而て田圃少く乏しい。且河の水横に逝れて、流未駃らず。再び霖雨に逢へば、海潮逆上りて、巷里船に乗り、道路亦塗になりぬ。」と、これに続く冬十月の条の「宮の北の郊原を掘りて、南の水を引て西の海に以て入る。其水を號けて堀江と曰く。」の記事は、古墳時代中頃ごろの難波周辺の低地の排水不良を訴え、それを解消するために、堀江が現在の大川の位置に掘られたとする解釈が定説となっている（新修大阪市史編纂委員会編 1988）。したがって、古地理図 2 は堀江の開削後、侵食で川幅が拡張して以降の景観である。

河内沖積低地　沿岸は弥生時代から沼沢地の環境が続いていたと考えられる。古地理図 2 では、平野川沿いに自然堤防が発達したが、それ以外は広い沼沢湿地とその中を網状に蛇行する水路が流れていた様子を描いている。

(3) 古代

巻頭図版 5（古地理図 3）は、古代の飛鳥～奈良時代をイメージして描いたものである。

上町台地　台地北端部では、前期難波宮（難波長柄豊碕宮）の造営に伴って、一気に開発が進む。もともと台地上の平坦面は広くない。限られた範囲を最大限に活用して宮殿が配されたが、その際、地形の凹凸を緩和するため、盛土と切土が行われた。これによって生じた排土は、宮殿周囲の谷に投棄され、この時代以降、谷の埋立てが顕著になる。後期難波宮では、前期とはやや異なり、平坦面を拡張するために、谷肩を積極的に埋めるような整地が行われている。また、埋立ての範囲も前期より広い地域が対象となっている。また、難波宮の周辺には藤原京や平城京などと同様に碁盤目状の京域整備が行われている。京域でも自然地形が改変され、谷埋めが認められる。四天王寺、阿倍寺、摂津国分寺、百済寺、百済尼寺のうち、後 3 者は寺域を確定し難いので、位置だけを示している。

宮域周辺の植生の衰退は顕著であり、草地や裸地が拡大する。しかし、台地全体が荒廃したわけではない。本町谷の下流域周辺にカシ類の林が推定できるように、宮域近辺の谷斜面や谷底などには温帯性針葉樹や常緑樹、落葉広葉樹なども残存していた。古代の植生変化は、京域整備に伴う人為的環境改変が大きく関係しているものの、一方で森林資源としての林地の管理も行われていた可能性があ

る（辻本 2014）。積山（2010）は後の大坂城本丸の地に、園林があったとも考えている。

難波砂州　古墳時代末ごろに砂州Eが堆積し、現在のJR難波駅の西側にまで海岸線を後退させた。砂州B・Dとの間にはラグーンD/Eが形成された。古地理図3に描いた潮口は、6世紀末の四天王寺建立に係る資材の水運のために開削されたといわれる鼬川の河口と、周防町通付近である。

ところで、当時の国家的港津である難波津の所在について中尾（2010）は、三津寺にあったとする千田（2001）説、高麗橋付近にあったとする日下（1985）説、内湾（河内湖側）にあったとする木原（1996）説などの説を紹介している。一方、道修町の入江は、泥質な底質が維持され、古代の遺物が多く出土している。その南岸の河口州1は弥生時代以降大きな侵食を受けることなく安定しており、松尾（2004）はここに港湾施設があったと考えている。

天満砂州南端部　『続日本後紀』巻15承和12（845）年9月の条には「河内摂津両国に仰せて難波堀川（難波堀江）に生ふる所の草木を刈り掃はしむ。石川・竜田川両川の洪流を引きて、西海に通ぜしめんが為なり。」とある。平安時代の初めには、大川筋はヨシやガマなどが群生する排水不良の湿地が広がっていたのであろう。大川の西岸にある造幣局東半部の地下には、この記事を物語る古代～中世にかけての泥層が堆積している。

河内沖積低地　平野川や狭山川（西除川）の河道は、両河川の合流地点より手前では沖積リッジを外れて低湿地を流れる悪水路となり、合流点以北では自然堤防に挟まれて固定されつつあった。川の東側は古墳時代から続いて低湿地であったとみられるが、寺院造営が頻繁に行われていた台地のすぐ西にある上町台地（狭義）と我孫子台地の間の低湿地は、人間が侵入できる程度に乾いてきていたと考えられる。平野川と台地に挟まれた低地の北部には、清水谷から北上した緩く蛇行する流れが推定できる。これは後に平野川の自然堤防と台地の間を流れた猫間川の前身であると考えられる。

この時期の耕地は台地や難波砂州でわずかに見つかっている。離水したラグーンU/Aの低地では水田とその大畦に畠があったと推定されている（大阪市文化財協会 1998）。しかし、難波京に住まう人々を支えるほどの耕地の広さは見つかっていない。

（4）中世

巻頭図版6（古地理図4）は、中世後半の室町時代をイメージして描いたものである。

上町台地　後期難波宮が廃絶した後、平安・中世と時代が降るにしたがって難波宮から遠い地域の谷が埋められている。しかも、かなり広大な地域で盛土も行われている。これは京域跡の整備の過程を示していると考えられ、人間活動の中心が南の四天王寺周辺に移動していったことを示唆する。四天王寺から国分寺跡には土塔村・東門村・川堀村・国分村が、現在の生玉町付近に高津村などが知られる。一方、難波宮の廃絶後の宮跡周辺は、開発から取り残されて畠地となっていたが、古代の園林に比定される大阪城の地に、16世紀になって大坂本願寺が築かれ、大坂寺内が繁栄した。

難波砂州　古代末か中世初めに、砂州Eが著しく侵食され、現在の難波付近を除いて海岸線が前進している。道修町の入江もダメージを受けたものと思われる。しかし、中世中ごろまでには、侵食地形は砂州Fの堆積により埋積されて、海岸線は西横堀川～難波付近まで後退し、建設省国土地理院（1965）が示す「難波砂堆」の西縁まで海岸低地が拡がっている。このように第3列の砂州は、砂州

ＥとＦが合体したものであり、上難波村は砂州Ｅに、木津村や三津村・津村は砂州Ｆに立地する（註 3）。海岸線はその後も後退しつづけ、中世末頃には、現在の木津川近くにまで達している。離水して乾燥した地域は広く畠地に利用されたと考えられる。それ以前、中世前期ごろには難波～木津川間は遠浅の砂質干潟が広がっていた可能性がある。

難波砂州の北端部では、道修町の入り江も離水して、畠地に利用されている。淡水化して縮小していたラグーン U/A の水域は、この時期、大川に直接繋がっていたかもしれない。ほぼ現在の位置に落ち着いた大川縁には、渡辺の港津が機能しており、渡辺から現在の松屋町筋を逢坂までに至る浜道や、四天王寺から南には熊野街道が整備されていた（大澤 2001）。

天満砂州南端部　渡辺の集落は、大川北岸にも広がっていたと考えられている。天満天神社が建立され、それより北側は広く畠地であったようだ。

河内沖積低地　平野川や西除川の流れが固定するとともに、平野川の自然堤防と台地に挟まれた低地を猫間川が流れた。猫間川は台地の谷や桃ヶ池・長池が並ぶ長居地溝の水を集めていたが、水量はさほど多くはなかったと考えられる。平野川の途中に 2 箇所、「入江」「堀江」と記した比較的広い水域があるが、これは江戸時代 1756 年の「難波往古図」（大阪都市協会 1980）に記された呼称である。「難波往古図」などの難波古図は、近世の大坂人からみた古代・中世の難波のイメージマップ（新修大阪市史編纂委員会編 1988）と言われるが、古地理図 4 の復元位置と一致したので呼称を援用した。

（5）豊臣期

巻頭図版 7（古地理図 5）は豊臣後期（1598 ～ 1615 年）をイメージして描いたものである。

上町台地　中世末の台地北端部周辺は、本願寺期の造成はあるものの、依然として大小の谷を残していた。本願寺跡地に位置する大坂城では、これらの自然地形を利用して本丸・二ノ丸などの主要施設が建設されている。しかし、内堀や中堀が開析谷（本丸谷・大手前谷）を利用していたように、豊臣前期における開発は自然地形の制約を受けたものであったといえる。台地上の城下町建設も、比較的凹凸の少ない台地の主稜線に沿う地域に南北の平野町城下町が建設されている。

豊臣後期になるとこの状況は一変する。1598 年からの開発は大坂城全域に及ぶ大規模なもので、大坂町中屋敷替と呼ばれる大造成であった。台地西北端部では厚さ数ｍを超える盛土が施され、釣鐘谷や本町谷などの台地上の谷のほとんどは姿を消した。また、急な斜面では雛段状の造成が行われるなど、利用可能な平坦面を多くつくる開発が行われ、現在にも残る規格的な上町城下町の町割りが成立したと考えられる。1594 年普請の惣構では、東横堀川から現在の空堀商店街の南を通り、清水谷を経て猫間川から平野川・大川に繋がる惣構堀が廻らされた。

古植生の情報は少ないが、人間による環境改変が継続したため、成長に時間がかかる樹木などは台地上から姿を消し、短期間で再生・回復した植生や耕作地などの人間の影響を強く受けた植生が成立したと考えられる（辻本 2014）。

難波砂州　豊臣期前期に道修町の入江北側の河口州 2 が盛土で嵩上げされて、船場の開発がはじまる。船場城下町の本格的な建設は豊臣後期に行われ、南久宝寺町通付近までは広域に嵩上げされた。古地理図 5 では松尾（2013、図 7）に倣って末吉橋通（現在の長堀通）以北を含めて図示した。水運

では台地沿いのラグーンU/A跡を利用した1594年の東横堀川を皮切りに、1598年の天満堀川、1612～1615年の道頓堀川が開通する。砂州Fの西側に沿う西横堀川とこれに取り付く東西の阿波堀川も1600年に開削が開始され、「水の都」大坂の動脈が形成されていく。

天満砂州南端部　豊臣前期、1586年に大川縁に大坂本願寺が造営され、西側の天満天神社の東まで天満寺内町が建設された。後期には西の天満堀川まで町並みが広がっている。天満堀川は弥生時代の中央ローブの西縁に沿って、1598年に現扇町公園付近まで開削された運河である。

河内沖積低地　平野川や猫間川の河道は人工的にも固定され、沖積リッジには南から田島村、小路村、猪飼野村、木野村、東小橋村、本荘村、中道村、中間村が並んでいる。干上がった低湿地は広く水田に利用され、河内低地の農村風景をみせている。

４、おわりに

本稿で解説した古地理図は、大阪市域における埋蔵文化財調査の今日的到達点の一表現形であり、今後行われる調査の設計図になり得るものと考えている。しかし、調査地の密度に粗密があるとともに、古い調査データには現在の基準では評価し辛いものも少なくないため、図の随所に推定が含まれている。今後の調査の進展により、明らかな誤りや修正が必要な個所が見つかるものと思われる。過去の具体的な痕跡に即してこれらの図が書き直され、上町台地とその周辺部における人間社会の実態が環境との関わりの中でより詳細かつ動的に解明されていくことを期待している。

本稿をまとめるにあたって、文献情報・考古情報チームの各位から多大なご教示・ご助言を賜った。特に大澤研一・松尾信裕・積山洋・豆谷浩之・杉本厚典の各氏からは、古代と中世後期・豊臣後期の集落や街道の分布に関して、具体的な修正意見をいただき、図に反映させていただいた。また、南秀雄・田中清美・京嶋覚の各氏には、古地理図の内容に関して有益なご意見をいただいた。以上の方々に厚くお礼申し上げる。最後に、本科研の研究代表者であり、この3月に大阪歴史博物館館長を退任された脇田修先生には、本研究の進展を温かく見守っていただいた。先生に深く感謝いたします。

註

(1) 平成21～25年度　独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究A　研究代表者：脇田修、課題番号21242031、「大阪上町台地の総合的研究―東アジアにおける都市の誕生・成長・再生の一類型―」。

(2) 天王寺七坂：千日前通から南へ真言坂、源聖寺坂、口縄坂、愛染坂、清水坂、天神坂、逢坂。

(3) 元禄元年（1691）新撰増補大坂大絵図（大阪都市協会1980）などに刷られた難波村･木津村が乗る砂州であり、梶山ほか（1985・1986）の「難波・金楽寺砂州」に当る。

引用文献

市川創2013「調査地周辺の地形と「河底池」」大阪文化財研究所『北河堀町所在遺跡発掘調査報告』 pp. 6-7

市川創2014「受け継がれた都市計画－難波京から中世へ」『平成21～25年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究A　大阪上町台地の総合的研究－東アジアにおける都市の誕生・成長・再生の一類型－』

pp. 147-159

市川創・松田順一郎・小倉徹也・趙哲済・辻本裕也・平田洋司 2011「古環境と人間活動の関係把握に向けて―大阪市上町台地を題材にして―」大阪文化財研究所編『大阪文化財研究所紀要』13　pp. 11 － 38

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2012「難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW10-1）報告書」『平成 22 年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2010）』 pp. 95-116

大阪市文化財協会 1996『森ノ宮遺跡』Ⅱ

大阪層群研究グループ 1951「大阪層群とそれに関連する新生代層」『地球科学』6　pp. 49-60

大阪文化財研究所 2012a『難波宮址の研究』第十八

大阪文化財研究所 2012b『恵美須遺跡発掘調査報告』

大阪都市協会 1980「大坂大絵図」「難波往古図 河州雲茎寺汁物」『大阪建築史夜話・大阪古地図集成』 付図

大阪市文化財協会 1998『住友銅吹所跡発掘調査報告』

大澤研一 2001「中世大坂の道と津」『大阪市立博物館 研究紀要』33 冊

小倉徹也 2013「上町台地東縁・河内沖積低地西端部の古地理変遷」『シンポジウム　大阪上町台地から都市を考える　発表資料集』 p. 86

梶山彦太郎・市原実 1985「続大阪平野発達史」『古文物学研究会』

梶山彦太郎・市原実 1986『大阪平野のおいたち』青木書店

木原克司 1996「古代難波地域周辺の景観復原に関する諸問題」『大阪の歴史』48 pp. 1-25

日下雅義 1985「摂河泉における古代の港と背後の交通路について」『古代学研究』107 pp. 1-13

建設省国土地理院 1965『土地条件調査報告書―大阪平野―』

建設省国土地理院 1983『土地条件調査報告書―大阪地区―』

新修大阪市史編纂委員会編 1988『新修大阪市史第一巻』

積山洋 2010「副都制下の難波京」『東アジアにおける難波京と古代難波の国際的性格に関する総合研究』pp. 79-96

千田稔 2001「難波津と住吉津」『埋もれた港』小学館ライブラリー pp. 179-185

高橋工 2007「細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について」大阪市文化財協会編『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅱ pp. 61-68

高橋工 2010「奈良時代の橋と難波京」大阪文化財研究所編『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅰ　pp. 67-71

高橋工 2011「四天王寺東方の埋没地形と難波京条坊」大阪文化財研究所編『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅱ pp. 23 － 26

高橋工 2013「大阪上町台地の古地形から見た難波京」『シンポジウム　大阪上町台地から都市を考える発表資料集』 p. 86

趙哲済 2006「船場・道修町、その成り立ちに迫る」『第 13 回道修町文化講演会（記録）』pp. 9 - 42

趙哲済 2007「大阪府上町台地の表層地質と堆積面区分」『地学団体研究会第 61 回総会（大阪）プログラム・講演要旨集・巡検案内書』p. 150

趙哲済 2012「背割下水の変遷」大阪文化財研究所編『大坂城跡』ＸＶ　pp. 21-24

趙哲済 2013「河底谷の成因に係わるいくつかの知見」大阪文化財研究所編『北河堀町所在遺跡発掘調査報告』pp. 53 － 57

趙哲済 2014「難波砂州北部～天満砂州南部の表層地質に関する覚え書」『平成 21 ～ 25 年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 A　大阪上町台地の総合的研究－東アジアにおける都市の誕生・成長・再生の一類型－』pp. 23-36

趙哲済・清水和明 2011「上町台地でも起こっていた歴史時代の地すべり」大阪文化財研究所編『葦火』155 号 pp. 6 － 8

辻本裕也 2014「上町台地およびその周辺の植生史」『平成 21 ～ 25 年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 A　大阪上町台地の総合的研究－東アジアにおける都市の誕生・成長・再生の一類型－』pp. 37-42

寺井誠 2004「難波宮成立期における土地開発」大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』12 pp. 161 － 170

寺井誠 2010「難波に運ばれた伽耶・新羅・百済土器―6 ～ 7 世紀を中心に―」『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』pp. 143 － 170

難波宮址顕彰会 1978『森の宮遺跡　第 3・4 次発掘調査報告書』

平田洋司 2013「大坂城周辺の地形と開発」『シンポジウム　大阪上町台地から都市を考える　発表資料集』p. 85

中尾芳治 2010「古代の難波と難波津について」『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』pp. 7 － 27

中田高・岡田篤正・鈴木康弘・渡辺満久・池田安隆 2008「大阪東南部第 2 版」『 1 ：25000 都市圏活断層図 国土地理院技術資料 D・ 1 －No. 502』建設省国土地理院

中田高・岡田篤正・鈴木康弘・渡辺満久・池田安隆 2009「大阪東北部第 2 版」『 1 ：25000 都市圏活断層図 国土地理院技術資料 D・ 1 －No. 524』建設省国土地理院

松尾信裕 2004「大阪城下町跡下層の遺跡」大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ　pp. 351 - 356

松尾信裕 2013「近世城下町大阪の誕生と拡大」『シンポジウム　大阪上町台地から都市を考える　発表資料集』pp. 41-48

松田順一郎 2014「NetLogo を用いた上町台地の古景観シミュレーション」『平成 21 ～ 25 年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 A　大阪上町台地の総合的研究－東アジアにおける都市の誕生・成長・再生の一類型－』pp. 43-45

Mitamura, M., CHO, C., Matsumoto, M. and Niki, H. (2012) Evaluation on the distribution of buried stone walls and banking construction of the former Osaka Castle with drilling data, central Japan *International Symposium on Geoinformatics for Spatial Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences 2012*.　pp. 18-23